福島・安子島城跡

1 所在地　福島県郡山市熱海町安子島字町・南町・館前

2 調査期間　一九九二年（平4）五月～一九九三年二月

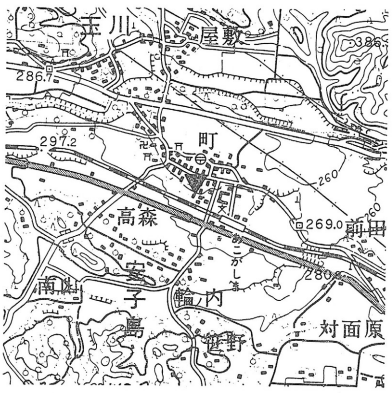
3 発掘機関　郡山市教育委員会・㈶郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

4 調査担当者　高橋博志・高井　剛

5 遺跡の種類　城館跡

6 遺跡の年代　一三世紀～一六世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（郡　山）

安子島城跡は、郡山市の中心部にある郡山駅の北西約一一kmにあり、奥羽山脈の縁辺部に位置している。遺跡は、北方を東流する五百川によりつくられた河岸段丘の第二段丘面に立地し、標高は二七〇～二八〇mを測る。

安子島城は、奥州藤原征伐の恩賞として安積郡（郡山市の中央を北流する阿武隈川の西岸一帯）を領有した安積伊東氏の一族である安子島氏の城館として知られている。城館は六つ以上の郭群を形成し、その面積は約一三万㎡に及んでいる。安子島氏の文献史料における初見は、応永一一年（一四〇四）の「仙道諸家一揆傘連判状」である。この史料には郡内各地域の伊東一族の名が見られ、惣領家の衰退と庶子分立によって安子島氏は地域の小領主として独立していたことを窺わせる。その後は周辺の有力大名の影響下にあるが、天正一七年（一五八九）に米沢の伊達政宗が会津の蘆名義弘を攻める際に、安積と会津を結ぶ要衝である安子島を攻略し開城させている。

安子島城跡の発掘調査は、団体営圃場整備事業に伴うものであり、郡山市教育委員会が一九九二年度に㈶郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団に委託実施したものである。調査面積は一二〇〇〇㎡に及び、貴重な成果を得ることができた。

調査の結果、四三〇〇基以上の柱穴をはじめ、竪穴状遺構・井戸・土坑・堀などが発見された。そして、調査区全域は安子島城の初期（文献に初見するより前の一三世紀末～一四世紀初頭）に造営された八〇m×九〇mの方形の館跡で、その後の増改修により現在ある安子島城跡が構築されたものと考えられるようになった。大まかに初期の段階、一五世紀の段階、一六世紀後半の段階の三段階に分けられる。

遺物の出土量はこの時期の遺跡としては比較的多く、整理用コンテナに二〇箱ほど出土している。内容的には一二世紀～一七世紀初

頭までの青磁・白磁・青白磁・染付・中国産褐釉陶器・国内産陶器（古瀬戸・常滑など）・火鉢・土師質土器や石臼・茶臼・硯・砥石などの石製品、刀子・釘などの鉄製品、漆器・曲物などの木製品が出土している。

木簡（柿経）五点は、全て外堀の南西隅の堆積土中より出土した。外堀は、城郭改修の最終段階である一六世紀後半に掘られたものと考えられている。共伴した遺物としては漆器・石臼などがあるが、陶磁器は出土していない。安子島城は、豊臣秀吉の奥羽仕置で会津に入部した蒲生氏の代官が安子島に置かれたのを最後に、少なくとも一六世紀末～一七世紀初頭には廃城になっていたものと考えられている。従って、木簡（柿経）の廃棄された年代は一六世紀後半、それも蒲生氏が入部した時には、堀が埋められている可能性も考えられるので、伊達氏が安子島を攻めた天正一七年（一五八九）前後に求めたい。

8　木簡の釈文・内容

(1)
・□〔如カ〕是我聞一時仏住王舎城者□
・□□〔倶有カ〕四阿修羅王婆稚□　(100)×11×0.3　081

(2)
・□〔大カ〕比丘衆万二千人倶皆是阿羅□□〔漢諸カ〕
・闍婆王美音乾闥婆王□□　(117)×11×0.3　081

(3)
・□〔無カ〕復煩悩逮得己利盡諸□□〔有結カ〕
・闍婆王楽乾闥婆王楽□　(92)×11×0.3　081

(4)
・□阿若□〔憍カ〕陳摩訶迦葉□〔如脱カ〕〔優カ〕
・□那羅王各與若干百□　(85)×11×0.3　081

(5)
・迦葉那提迦葉舎利□
・那羅王妙法緊那羅□〔王カ〕　(75)×11×0.3　081

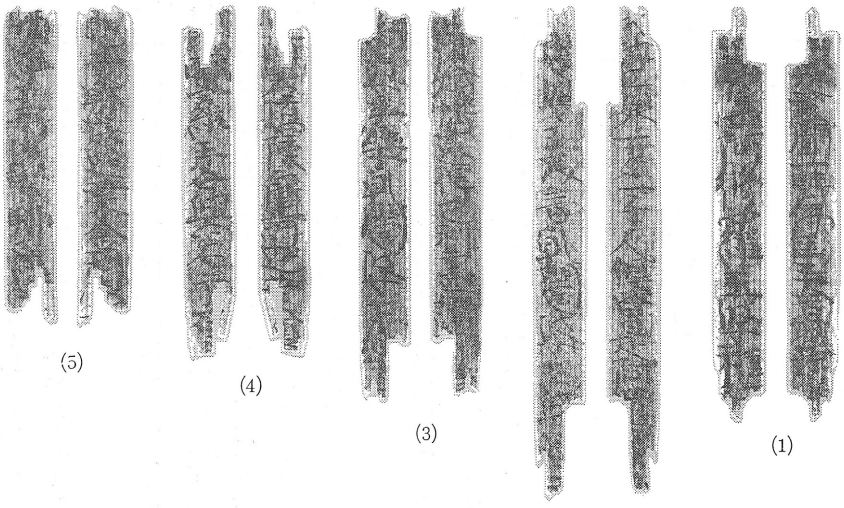
(1)～(5)は、『妙法蓮華経』序品第一を書写した連続する五枚の柿経である。表は冒頭の五行分（大正新脩大蔵経第九巻一頁下段16～21行）、裏は中途の五行分（同二頁上段24～29行）に相当し、表とは逆に(5)から(1)の順に書写されている。(5)表と(5)裏の間には26行あるはずで、表から裏へ書き継いでいったとすれば、一八枚の表裏に書写していることになる。

なお、釈読は郡山市田村町上行合の上合寺住職である菅原殊英氏のご教示を得た。

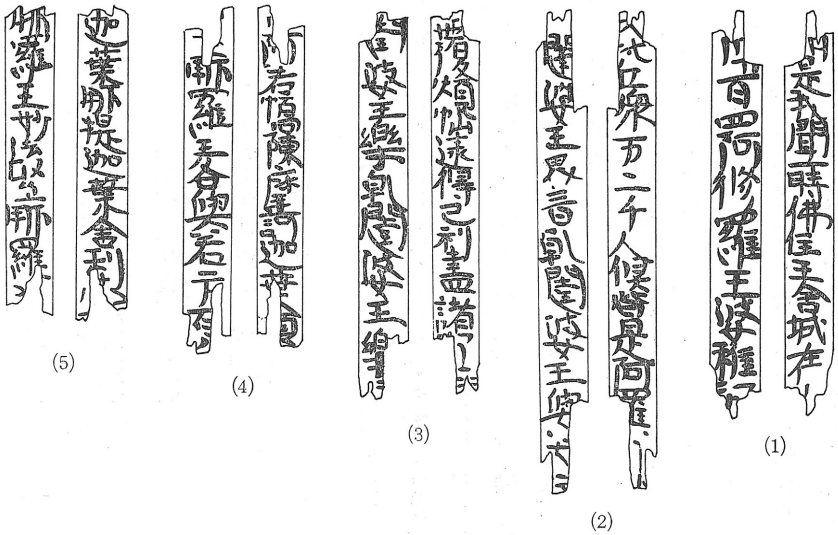
9　関係文献

郡山市教育委員会・㈶郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団『郡山の埋蔵文化財　ふるさと歴史展　安積野のパイオニアたち』（一九九三年）

（高橋博志）



(1) (2) (3) (4) (5)



(1) (2) (3) (4) (5)